
落としモノは何ですか？

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落としモノは何ですか？

【著者名】

Z8955F

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

「落としましたよ」と言わされたから、私は背後を振り返った。

落としモノは何ですか？

「落としましたよ」と言われたから、私は背後を振り返った。すると、そこには中々笑顔の爽やかな好青年が立っていて、私を見ていた。

財布かハンケチでも落としたのかと思って、ポッケを弄ねじねじつたが、財布もハンケチもちゃんとあった。

青年の手元を見ても何もない。

「えっと……」

「あなたの恋心を拾いました」

一皿散に逃げた。正直、きもかった。

そしてまた私は背後から言られた。「落としましたよ」

さっきの声とは違つたので、走つた所為で財布を落としたかもしれない、振り返る。

さっきの男が立つていた。おかしいなあ、声が違つたのに。走り出す準備をしつつ、単に他人の空似かもしないと、訊く。

「私、何を落としました？」

「恋」

走つた。やっぱり、同一人物だったのだ。

そして三度目の「落としましたよ」がやってきた。

私は振り返らなかつた。そしたら、追つかけてくる足音がして、恐くなつて走つた。

「待つてください。お嬢さん」

「いやつ。来ないでストーカー」

「私はストーカーじゃありませんっ！」

やつぱり声は違うのだけれど、一度目で解つていて、あの好青年は声真似が出来るのだ。

段々足音が近づいてきて、ついに足音は私を追い越して、前に立ち塞がつた。

あの青年ではなかつた。やや小太りの男性で、しかし、彼は何も持つてはいなかつた。

財布もハンケチもやつぱりあつた。

「何なの？ 何なの？ おかしいよつ！」私は叫んだ。

男性が言つた。「あなたの常識を拾いました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8955f/>

落としモノは何ですか？

2010年11月11日19時05分発行